

日英語話者の視点構図と事態内参与者の 言語化/非言語化

濱 田 英 人

0. はじめに

人間は人種や民族を問わず共通に有する基本的な認知能力を有しており、その能力を活性化させて事態を捉え、それを言語化することでコミュニケーション活動をしている。人間言語の分化は人種や民族がそれぞれの環境の中で育んできた「好まれる事態の捉え方とそれを基礎として生じた好まれる言い回し(言語表現)」の結果であり、人間が共通に有している認知能力の中のいずれかを主に活性化して事態を把握するかが固定化したものと考えることができる。¹ 事実、この言語話者の事態把握の仕方と言語表現の関係については(1)、(2)に示されるようにこれまでも多くの研究者によって指摘されてきている。

- (1) 〈話者〉が採るスタンスは、その際に〈話者〉によって発せられる特定の文のさまざまなレベルでの構造的特徴として具現化される。従って、もしある言語の〈話者〉によって好んで採られる〈事態把握〉のスタンスがあり、それが繰り返し実践されるならば、それは結果的にその言語の〈(話者によって)好まれる言い回し〉(‘fashion of speaking’: Whorf (1956 [1939]: 158, 159) と呼ぶような形で、多かれ少なかれ慣習化したものとして扱われうるようになるだろう。

(池上 2011: 59)

¹ 濱田(2011)はLangacker(1999)で述べられている人間の基本的な認知能力を踏まえ、日英語話者がそれぞれどの認知能力を主に活性化して事態把握をし、言語表現するのかを中村(2009)のIモード認知/Dモード認知の視点から論じている。

- (2) Languages differ systematically in *rhetorical style* — that is, the ways in which events are analyzed and described in discourse. [. . .] I want to propose that rhetorical style is determined by the relative *accessibility* of various means of expression, such as lexical items and construction types. That is, *ease of processing* is a major factor in giving language-particular shape to narratives. At the same time, cultural practices and preferences reinforce habitual patterns of expression.

(Slobin 2004: 5)

そしてこの「言語話者によって好まれる言い回し」は語順の問題を含めていくつかの側面から考えることができるが、小稿では事態内参加者の言語化と非言語化の問題を取り上げ、それを認知言語学の視点から考察し、そのメカニズムを明らかにすることを目的とする。具体的には Hinds (1986) の (3) の指摘、つまり、英語では対象物である実体が一般的なモノの場合には言語化されないが、それに対して日本語では特定のな実体が言語化されないという違いが何に起因するのかを、中村 (2004, 2009) の主張する I モード認知 / D モード認知の視点から考察し、日英語話者の事態把握の違いからこの違いについて原理的な説明を試みる。

- (3) In the following examples, a typical object which may be left out is enclosed in brackets.

We usually eat [dinner] at 7:30.

Ken drinks [sake] too much.

Every afternoon I read [books] for two hours.

[. . .] we can recognize many sentences without objects: もうとったの? ああ見た見た。 But do we want to say that these verbs are being used pseudotransitively? I don't think so. The reason is that when verbs are used pseudotransitively in English, the omitted object is a generic entity, whereas in

the examples I have given for Japanese, the object is specific. [. . .]

In fact, this is a very clear difference between English and Japanese. When the object for such verbs is a general object such as dinner, sake, and so on, the object is often left out in English. In Japanese, on the other hand, such objects are usually put in, but the specific ones may left out. Compare the following:

What did you do with the fish I bought yesterday?

I ate **it**.

きのう買ったさかなはどうなりましたか？

食べました。

We always eat at 7:30.

ぼくらはいつも7時半に**ごはん**を食べます。

(Hinds 1986: 50-51)

1. 人間の事態把握の本質

人間はある対象物や事態を知覚し、それが何であることを認識するわけであるが、この場合知覚と認識は同時並行的であり、その対象物や事態を real-time 処理 (real-time processing) で把握しているということになる。対象物や事態の存在は認知主体がその対象物や事態を知覚することでいわばその存在が確立するのであり、それが何であるかという認識は知覚とほぼ同時並行的に概念世界でなされるわけである。そして、この知覚作用と概念操作が同時並行的であるために通常我々はそれを切り離して考えるということではなく、また、この知覚作用と概念操作の主体である認知主体の意識が対象物や事態に向けられている場合は自分で自分の存在を意識することは通常ないので、知覚対象と認知主体の関係も同様に分離して考えることはないのである。

その一方で我々はたとえその処理の最中であっても、自分がしていることを自覚することもできる。つまり、「メタ認知」することができる。「メタ認知」とは、「自分自身が、自分自身を把握するという形で認知が成立する」という脳内現象であり、この能力があるために我々人間は自己の認知活動（知覚する、

記憶する、理解するなど)を客体視し、それをモニターすることができ、また「自己評価」することが可能となるわけであるが、このメタ認知のメカニズムについて茂木(2004)は(4),(5)のように述べている。

- (4) 脳の中に「小さな神の視点」を獲得するメカニズムは主体と客体が最初から分離している通常の認知モデルでは捉えきれず、むしろ、自己の内部状態の一部を、あたかもそれを外から観察しているかのように認知する、「メタ認知」のモデルで捉えるのが適切であると考えられる。(図8-5)

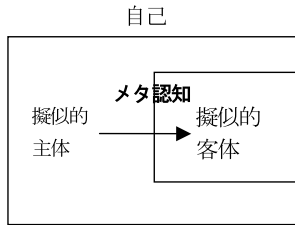


図8-5 メタ認知のモデル

(茂木 2004: 191)

Figure 1

- (5) 私たちは、認知というものを、主体と客体が独立して存在し、主体が客体を観察する、図8-4のようなモデルで考えがちである。しかし、実際に私たち人間は自己の内面にあるものを認知することしかできないのである。すべては脳内現象なのだ。—中略— 通常の認知のモデルは、このようなメタ認知において仮想的に立ち上がる「客体」(実際には自分の一部である)を、自己の外側に外挿して得られるに過ぎないのである(図8-6)。—中略— 自己の内なるものの関係性を、「外」にあるかのごとく認識するというメタ認知のプロセスを通して、ホルンクルスの「小さな神の視点」は生み出されるのである。

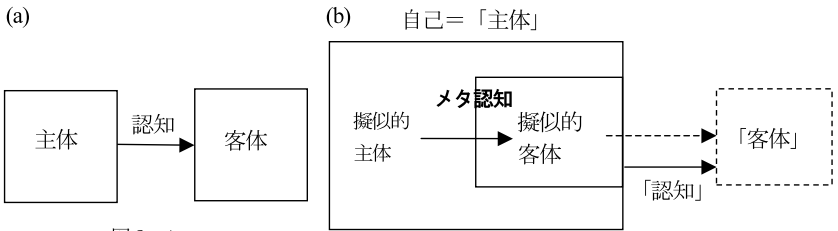


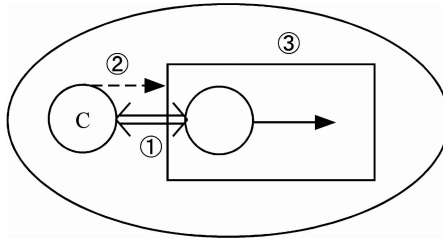
図 8-4

図 8-6 メタ認知から客体が外挿され認知のモデルが立ち上がる様子

(ibid.: 192-193)

Figure 2

そして、この知覚と認識が平行している事態把握とメタ認知による事態把握という認知の2つの在り様は中村 (2004, 2009) の主張する「Iモード認知 (Interactional mode of cognition)」と「Dモード認知 (Displaced mode of cognition)」にそれぞれ対応しており、言い換えると、この2つの認知モードは人間の有している認知の在り様を精密に記述したものとと言える。中村は「言語の本質は我々認知主体が何らかの対象との主客未分の直接的な身体的インタラクションを通して認知像を形成しているということであり、その一方で我々はこの認知の場から外に出て認知像を客観的事実としてメタ認知することもできることにある」と述べ、本来的には対象との身体的インタラクションによって得られた認知像をメタ認知することで身体的インタラクションが背景化され、客体として認識することが可能となるとし、それぞれの認知モードを図3、図4のように図示している。



外側の楕円：認知の場（domain of cognition）

C：Conceptualizer（認知主体）

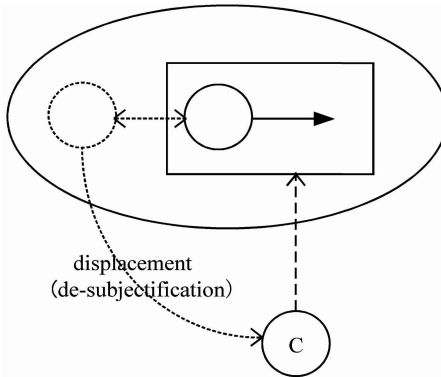
①両向きの二重線矢印：身体的インタラクション
（e.g. 地球上のCと太陽との位置的インタラクション）

②破線矢印：認知プロセス（e.g. 視覚や視線の移動）

③四角：認知プロセスによって構築される認知像（e.g. 太陽の上昇）

（中村 2009： 359）

Figure 3: I-mode



（ibid.: 363）

Figure 4: D-mode

このIモード認知／Dモード認知という2つの認知モードは人間の事態把握の在り様を明らかにしたものであり、普遍の原理であるが、先にも述べたように人種や民族がそれぞれの環境の中で育んできた好まれる事態の捉え方、またそれを基礎として生じた好まれる表現形式があることも確かであり、この視点か

ら日英語の違いに関して中村（2009）は以下のように主張している。

- (6) a. 日本語は I モードを強く反映している言語である。
- b. 英語は D モードを強く反映している言語である。

また、この I モード認知と D モードの認知の事態把握の違いを次のようにまとめている。

- (7) a. 参照点型認知（I モード）かトラジェクター・ランドマーク型認知（D モード）か
 - b. 非有界的認識（I モード）か有界的認識（D モード）か
- （中村 2009: 365）

つまり、I モード認知では認知主体は対象物や事態を知覚と平行的に real-time 処理 (real-time processing) で認識し、それを把握するので、図 5 のようにその事態をそれが展開する順にたどる把握の仕方となり、この順にたどるとい認識が何かを目印 (参照点 (R)) として目標物 (T) を見つける把握の仕方を動機付けるのである。また、この認知モードによる事態把握では認知主体は記述対象の事態を臨場的に捉えることになるので、この臨場感のためにその事態は非有界的 (unbounded) に認識されることになるのである。

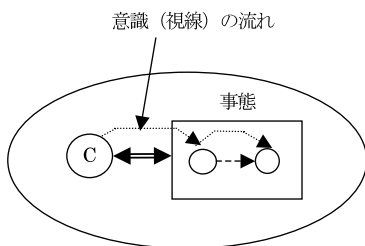


Figure 5

それに対してDモード認知とは事態のメタ認知であり、これによって認知主体は概念レベルで鳥瞰図のように事態を「認知的に観る」ことが可能となる。そしてこのような事態把握では認知主体はその事態の「始まり」と「終わり」を含んだ全体を視野に入れることになるので、その事態は有界的 (bounded) に認識されるのである。このことに加えて、一般的に我々はある風景を眺めるとき、いつまでもその全体を漠然と観ているのではなく、何らかの要因により、そのどこかに視線を向けることである対象や事態が前景化され、相対的にその他の部分が背景化されるということを日常的に経験する。つまり Figure/Ground 認知であるであるが、事態をメタ認知し、鳥瞰図的に認識した場合にもこれと同様の認知操作が概念世界でもおこるわけであり、このことによって図6に示されるように事態内の参加者をその目立ち度に従って1番際立って認識される実体 (entity) をトラジェクター、2番目に際立って認識される実体をランドマークとして事態把握するわけである。

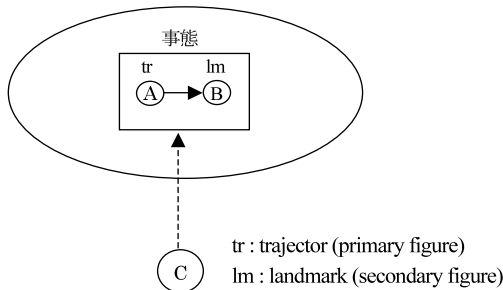


Figure 6

2. 認知モードと事態内参加者の言語化・非言語化

この節では第1節で述べた人間の事態把握における認知の在り様から日英語における事態内参加者の言語化と非言語化について考えてみる。ここで重要なことは中村(2004, 2009)が主張するように日本語がIモード認知を強く反映しているのに対して、英語がDモード認知を強く反映しているということであり、

それによってそれぞれの言語話者の「(認識上の)「見え」の範囲」も異なっており、そのために事態の参与者の言語化も異なってくると考えるのが自然である。そしてこのことは (8) のような卑近な例を考えても明らかである。

(8) a. 「あっ、(機械が) 壊れちゃった。」

b. “Oh, no. I broke it.”

この(8)は機械を操作している最中にそれが壊れてしまったような場面での発話であるが、このような場合、日本語話者の場合は図7 (a) に示されるように自分は「見え」の範囲にはないので言語化されず、また、「機械」も言語化されないことも多い。それに対して、英語話者の場合にはその事態をDモードで認知するので、図7 (b) のように自分も「見え」の範囲に存在し、また、機械も‘break’の対象として認識されることで、それぞれがトラジェクター、ランドマークとして捉えられ、(8b) のように言語化されるのである。

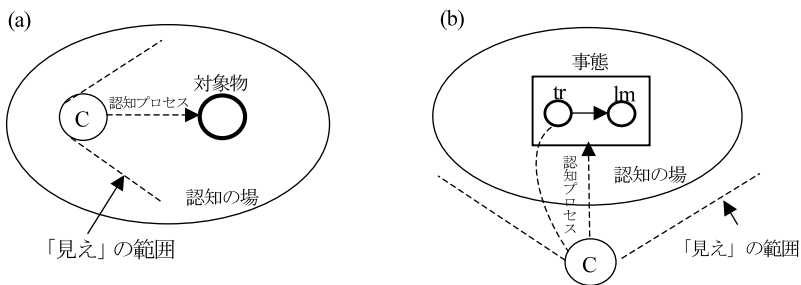


Figure 7

2.1. Iモード認知と事態内参与者の非言語化

先にも述べたようにIモード認知では認知主体は対象物と直接インタラクションすることでそれを把握するので、認知主体自身は自分の「見え」の範囲には存在しないので言語化の対象にならないわけであるが、そうすると(8a) のように行為の対象も言語化されない場合があるのはなぜなのかということが

問題として残る。結論的にはこのことは I モード認知の本質に関わる問題であり、ここでは 図 8 (a-b) のような卑近な例で考えてみる。

(a) 薬ビンの注意書き



(b) 乾燥剤の注意書き

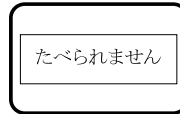


Figure 8

図 8 (a) は薬ビンの注意書きであり、図 8 (b) は乾燥剤の注意書きであるが、この注意書きには何を保管するのか、あるいは何を食べてはいけないのかという対象が明記されていない。それにも関わらず我々は保管する対象や食べられない対象は眼前の、あるいは手に持っている薬ビンや乾燥剤であることが分かるのである。つまり、このことは I モード認知では認知主体が対象と直接インタラクションすることでそれを把握することになるので、その対象を言語によって記号化するのではなく、むしろ実物そのものがそのまま意味の一部を担うことができることを端的に示しているのであり、いわば「実物+言語表現」で意味が完結しているわけである。そしてここで重要なことは、先にも述べたように I モード認知というのは人間の基本的な事態把握の在り様の 1 つであり、D モード認知を事態把握の基本とする英語話者も I モード認知で対象を捉えることは当然可能なわけであり、たとえば、包装紙等の表示でよく見られる ‘tear (to) open,’ ‘pull (to) open’ のような表現では開ける対象は眼前にあるのでそれをあえて言語化する必要はなく、この場合には英語話者も I モード認知でそれを把握していると言えるわけである。

しかし、このような事態把握の仕方と事態内参加者の非言語化は日本語ではごく一般的であるのに対して、英語ではそうではないことは、次の (9b) のよ

うにたとえ眼前にある対象物の描写であっても、英語では事態内参加者が *tr* あるいは *lm* として認識されれば、そうした要素は名詞や代名詞で言語化されなければならないことから明らかである。

(9) a. *The farmer chased the ducking, but he couldn't catch it.*

b. [seeing a farmer chase a ducking] **He'll never catch it.**

(Langacker 2009: 122)

それに対して日本語話者の場合には認知処理の段階では (10a) のように認知の場の中の実体を含めて意味を構成するわけであるが、実際の発話では (10b) のようにその実体をあえて言語化する必要がないのである。

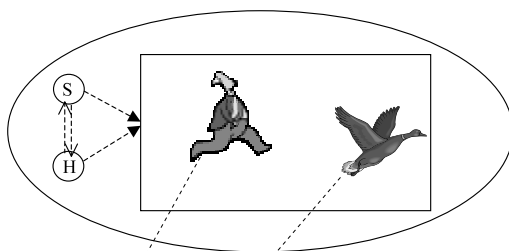


Figure 9

(10) a. ありゃー、(は を) 捕まえられないわ。(概念化者の認知処理)

b. ありゃー、捕まえられないわ。(実際の言語表現)

そして、このことに関して更に言えば、次の (11) は友人と一緒に作業をしているときに、その友人が消しゴムを使い、それを自分も使いたいという場面でそれを相手に伝えるような場合であり、(12) は美術館で話者と聞き手が同じ絵を観てそれについて述べるような場合であるが、このような身近な例からも英語とは違って日本語話者の場合には消しゴムや絵をあえて言語化する必要が

ないのである。

(11) a. 使っていていい？

b. Can I use it ?

(12) a. きれいだね。

b. It's beautiful.

そして、ここに中村 (2009) が (6) のように日本語は I モードを強く反映している言語であるのに対して、英語は D モードを強く反映している言語であるという真意があるわけであり、I モード認知では認知の場の中に聞き手と対象物がある場合、図10に示されるように話者と聞き手の間で対象物に対する共同注意 (joint attention) が成立していれば、それを言語化することなく理解することが可能なわけである。² 従って、このような場合には対象物をあえて記号化 (言語化) する必要はなく、眼前の対象物が聞き手に理解できていると判断できる場合には、(13) のようにそれについての叙述部分だけが言語化されるということが起こるのである。

(13) ちょっと借りてもいい？

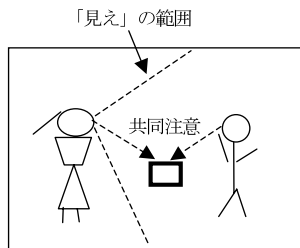


Figure 10

² 本多 (2011: 127) は共同注意とは「他者と一緒に同じものに注意を向けること」であり、「他者の視線を追いかけてその人が見ているものを自分も見る」「指さし、声かけなどによって、他者の注意を自分が注意を向けているものに向けさせる」などの行為によって成立すると述べている。

これまで述べてきたように、日本語話者にとっては言語化されない指示対象は認知の場に明確に存在しているのであり、言語化されるのは叙述の部分だけであるが、全体としては対象を含んでいる表現ということになるのである。従って、日本語話者の言語感覚からすれば、これは「省略」というのではない。このように考えると、(8a)の「壊れちゃった」と「機械が壊れちゃった」の違いのように行為者や行為の対象を言語化するかどうかは Langacker の提唱する認知文法の枠組みで言えば、(14)のように述べられている specificity（詳述さの度合い）の問題であるといえる。つまり、話者は聞き手との共同注意の確立の有無や聞き手が対象をどの程度想起しやすいかを考えてどの程度詳しく述べるかを決定するのであり、次の(15 a-c)の対象物の「ゼロ表示」「これ」「この本」はその結果の現れということである。

(14) An expression's meaning is not just the conceptual content it evokes — equally important is how that content is construed. [. . .] One dimension of construal is the level of precision and detail at which a situation is characterized. I can describe the temperature by saying that it is *hot*, but also — with progressively greater specificity — by saying that it is *in the 90s*, *about 95 degrees*, or *exactly 95.2 degrees*.

(Langacker 2008: 55)

- (15) a. ちょっと借りてもいい？
b. ちょっとこれ借りてもいい？
c. ちょっとこの本借りてもいい？

以上、日本語話者の事態内参加者の非言語化が I モード認知から自然に説明することを述べたが、このことは(16)の過去の事態を話題にする場合のように対象物が発話時には存在しない場合についても同様にあてはまると言える。

(16) A : あの CD 結局どうしたの？

B : とうとう買っちゃったよ。

この (16) では CD は発話時の場面の中には存在していない。しかし、ここで重要なことは、日本語話者の想起する場面はやはり I モード的な認知であるということである。つまり、英語話者とは違い話者が自分自身を客体化するという認知操作は関与していない。(16A) の話者も (16B) の話者も共に 図11 のように I モード的な認知で過去の事態を想起し、その中の特定の対象物（この場合は CD）を話題にしているのであり、その事態を経験の中で共有しているからこそ、互いの「認識上の「見え」の範囲」にある対象物に対する共同注意が成立し、互いの会話が成り立つのである。

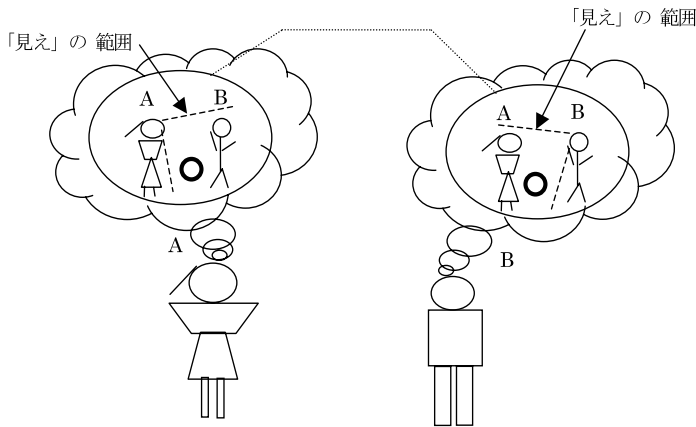


Figure 11

これは本多 (2005: 38-39) で述べられているエピソード記憶における「視野の記憶 (field memory)」と「観察者の記憶 (observer memory)」の違いということであり、前者は過去の自分自身の視野からの「見え」をそのまま再現したものであるのに対して後者はメタ認知による視野の「見え」であるが、(16 A-B) は日本語話者の場合にはこの「視野の記憶」が事態把握において優勢である

ことを示している。このことは、日本語話者の場合にはI認知モードによる事態把握が基本であるため、発話場面对象物そのものがない場合でも、同様の認知モードによる事態把握が可能となり、言語習得の過程でこの事態把握の仕方が慣習化することで、直接知覚を伴わない心的知覚のレベルでも同様の認識が可能となった結果であると考えられる。もっと言えば、日本語話者の場合にはこのような事態把握の仕方が慣習化されているために「手を洗う」「車を買う」「映画を観る」という行為にその行為者を想起しなくても違和感がないほど行為そのものの概念的自立性が英語よりも高いとも考えられる。³

2.2. 英語話者のDモード認知の獲得と事態内参加者の言語化／非言語化

先に(11b), (12b)で述べたように、英語話者の場合にはたとえ話者と聞き手の間で対象物に対する共同注意が成立していても、主語や目的語を言語化する必要がある。この節ではこの英語話者の言語感覚と認知メカニズムについて考えてみる。結論的にはこのことは、英語話者のDモードによる事態把握に起因するということになるのであるが、ではなぜDモード認知なのかというと、それは英語話者の場合には主語や目的語を義務的に言語化する必要があるため、記述対象の事態を構造的に捉えるという認知操作を必要とし、そのために事態をメタ認知するという認知過程を必然的に伴うことになるからであると言える。つまり、図12に示されるように英語話者は事態を知覚・認識すると、主語を認識するためにその事態をメタ認知し、いわば「事態を構造的に捉える概念的鋳型」というフィルターを通してその事態を認知処理するのであり、そしてこの認識の過程で参加者をtr/lm認知するということが慣習化し、それが言語話者の社会の中で「好まれる表現形式」として定着していると考えられる。

³ この日本語における「行為そのもの」の概念的自立性の問題については濱田(2011)を参照。

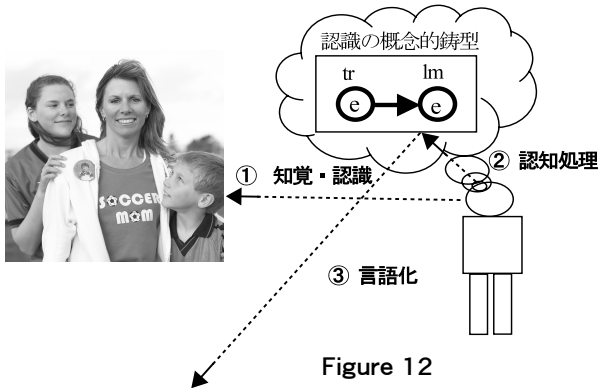


Figure 12

(17) Stephanie has two children.
 tr lm

そこでこの点について更に議論を進め、ではなぜ英語話者の場合には事態内参加者の tr/lm 認知が慣習化し、それが言語話者の社会の中で「好まれる表現形式」として定着しているのかということ、それは中村 (2009) の主張する I モードから D モードへ捉え直しの結果であると考えられる。つまり、人間の事態把握は I モード認知が本来的であり、それをメタ認知することによって D モード認知を獲得するとすると、このことはまさに英語話者の母語習得にも当てはまるということである。そして事実、Tomasello (2003) の (18) の主張からも英語話者が幼児の段階では I モードで事態を捉えていることが窺える。

(18) The child's earlier verbs were about single entities acting or undergoing changes of state or being acted upon by the child herself. (The latter case refers to utterances of the type Kick ball, as the child kicked it herself — the proposal being that for these utterances the self is egocentrically presupposed and not a part of the underlying conceptualization.) [. . .] Finally, it has been often noted that children speaking English and other languages quite often do not overtly express subjects in their early utterances.

(Tomasello 2003: 215-216) (下線筆者)

そしてこのことに加えて、Tomasello (2003) の次の (19) の主張は極めて重要である。というのは、英語話者の母語習得において英語の主語の概念の習得が不可欠であるということは、主語を認識するために事態をメタ認知し鳥瞰図的に捉えるという認知操作が必要となるからである。

- (19) The English subject is a very specialized syntactic role that involves a number of different functions, many of which do not occur together in the same category in other languages. [. . .] In Keenan's (1976) famous account, cross-linguistically there are something like 30 features associated with categories that approximate the English subject. [. . .] The only experimental evidence that English-speaking children have mastered the notion of subject concerns children approaching school age. Using a training procedure, Braine et al. (1993) taught children to place a plastic token on the picture representing the subject of a token sentence — using many different kinds of subjects — and then looked to see if they could generalize to subjects in novel sentences of many different kinds. The first evidence that they could came at 5-6 years of age. Following Croft (2001), one possible explanation for the late acquisition of English subject is that, in reality, each abstract construction such as transitive, intransitive, passive, and there-construction actually has its own subject. The generalized notion of the subject role in an utterance or construction — which children would have to have mastered to perform well in most of the experiments — represents the finding of a set of commonalities among these many and varied construction-specific subjects. That is, subject represents a syntactic role in something like a highly general Subject-Predicate construction at the most schematic level of constructional hierarchy.

(Tomasello 2003: 168-169) (下線筆者)

つまり、英語話者のDモード認知の獲得は、幼児期に大人の発話を聞く中で複雑な主語の概念を習得する過程に伴うそうした概念の抽象化（スキーマ化）に

端を発し、この主語の概念の確立によって事態を構造的に關係概念として捉えるという認識が生まれ、それが慣習化することで、「主語」や「目的語」が統語上存在し、精緻化 (elaboration) されなければならない e-site (スロット) として認識されることによって生じるものであると考えられる。これは言うまでもなく事態をメタ認知するということであり、この過程を通して英語の母語話者がDモード認知という事態の認識の仕方を確立していくものと考えられることができるのである。⁴

そこで、これまで述べてきたことを踏まえて小稿の議論の出発点であり、明らかにすべき問題である英語話者が事態内参加者を言語化しない場合について考えてみると、重要なことは英語話者の場合には図12のような事態を構造的に捉える枠組みが認識構造として確立しており、そのために事態内参加者はその認識構造の e-site (スロット) を満たすものとして認識されているということである。従って、先に見た (3) の 'eat [dinner],' 'drink [sake],' 'read [books]' における要素の非言語化のメカニズムは日本語の場合とは明確に異なり、そこにスロットがあるという認識が前提にあり、その要素が特に問題とならない場合に一般化され、背景化されることによって起こる現象であるということである。

3. まとめ

小稿では Hinds (1986) で述べられている日英語話者の事態内参加者の言語化／非言語化の問題をそれぞれの言語話者の事態把握の違いから考察し、英語では一般的なモノが言語化されないのに対して日本語では特定のモノが言語化されないのは何故かをそれぞれの言語話者の認知メカニズムの違いから明ら

⁴ Tomasello (2003) の主張を基に考えると、幼児期 (1 歳頃) に類似した発話を具体的な場面で何度も聞くことによって、パターン認識ができるようになり 'throw X' のような軸語スキーマ形成により X というスロットを形成することでカテゴリー化が可能となり、更に 3～4 歳を境にして動作主や被動作主 (主語や目的語) を標示する生産的な統語的装置として「語順」を理解するようになり、更に就学年齢 (5～6 歳) までに複雑な主語の概念を習得し、主語が統語的に重要な役割を担っているという認識過程を経て Dモード認知という視点構図を確立すると考えられる。

かにした。また、小稿では人間の基本的な事態把握の在り様として中村（2009）の主張するIモード認知とDモード認知の本質とは何かを事態内参加者の言語化と非言語化を通して明らかにした。具体的には同じ状況の中で同じ経験を言語化する場合でも日英語話者で言語化が異なるのは、日本語話者とは異なり英語話者の場合には母語習得の過程で形成される事態認識の概念的鋳型を通して事態を言語化するために、事態をメタ認知するという認知過程が必然的に含まれているのであり、これがDモード認知を動機付ける要因であることを述べた。

※本研究は平成24年度札幌大学研究助成（個人研究）の研究成果の一部である。

主要参考文献

- 濱田英人（2011）「言語と認知 - 日英語話者の出来事認識の違いと言語表現 -」『函館英文学』第50号, 65-99. 函館英文学会.
- 濱田英人（2012）「日英語話者の視点構図と言語表現」『文化と言語』第76号, 69-92. 札幌大学外国語学部紀要.
- 本多 啓（2005）『アフォーダンスの認知意味論 - 生体心理学から見た文法現象』東京学出版会.
- 本多 啓（2011）「共同注意と主観性」『主観性と主体性』127-148. ひつじ意味論講座5. 東京:ひつじ書房.
- 池上嘉彦（1981）『「する」と「なる」の言語学』大修館書店.
- 池上嘉彦（2011）「日本語と主観性・主体性」『主観性と主体性』ひつじ意味論講座 第5巻, 49-67. ひつじ書房.
- Langacker, Ronald. W. (1993) "Reference-Point Constructions." *Cognitive Linguistics* 4. 1-38.
- Langacker, Ronald. W. (1999) *Grammar and Conceptualization*. (Cognitive Linguistics Research 14.) Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Langacker, Ronald W. (2008) *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. Oxford: Oxford University Press.
- Langacker, Ronald W. (2009) *Investigations in Cognitive Grammar*. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Hinds, John (1986) *Situation vs. Person Focus*. 東京:くろしお出版.

Tomasello, Michael (2003) *Construing a Language: A Usage-Based Theory of Language Acquisition*. Harvard University Press.

茂木健一郎 (2004) 『脳内現象』 東京: NHKブックス.

中村芳久 編 (2004) 『認知文法論Ⅱ』 東京: 大修館書店.

中村芳久 (2009) 「認知モードの射程」『「内」と「外」の言語学』 353-393. 東京: 開拓社.

Slobin, Dan (2004) “The Many Ways to Search for a Frog: Linguistic Typology and the Expression and Motion Events.” In S. Stromqvist and L. Verhoeven (eds.), *Relating Events in Narrative: Vol. 2. Typological and Conceptual Perspectives*, 219-257. Psychology Press.